



# 宇部市立図書館 リニューアル市民委員会 開催報告書

## 第 2 回リニューアル市民委員会

日付:2022年10月22日(土)

時間:9:30-12:00

会場:宇部市立図書館 2F 講座室

# 目次

実施概要	2
日時	2
場所	2
参加人数	2
プログラム	2
要約	2
テーマ別ディスカッション	3
宇部市立図書館基本構想の振り返り	3
① 「知りたい」「学びたい」を支える情報収集・発信拠点	4
② ひとやまちとの新たな交流と創造を生み出す場	7
③ 子どもから大人まで誰もが自分らしさを表現できる居場所	9
考察	11
記録写真	12

# 実施概要

## 日時

2022年10月22日(土) 9:30-12:00

## 場所

宇部市立図書館講座室、オンライン

## 参加人数

合計 21 名（会場参加:20 名、オンライン参加:1 名）

## プログラム

1. オリエンテーション(これまで／これからの検討の流れ)
2. 第1回市民委員会の振り返り・共有
3. テーマ別ディスカッション(前半)
4. 休憩
5. テーマ別ディスカッション(後半)
6. 発表
7. 次回について

## 要約

宇部市立図書館リニューアル基本計画(以下、基本計画)策定に向けた2回目のリニューアル市民委員会(以下、市民委員会)として、主に第1回目のリニューアル市民委員会で挙げられた委員たちからの提案や質問に答える形式で企画した。特に、以下の2点については、対話的な委員会形式として重要な点であるため、開始時間を30分繰り上げる等の対応を講じた。

1点目は、多くの委員より懸念として示された、これまでの検討の進捗とこれからの検討の流れについて、可能な範囲で情報を公開し、リニューアルに向けて市民ともにつくる図書館の姿勢を提示すること。2点目は、宇部市立図書館リニューアル基本構想(以下、基本構想)の検討の流れを踏まえて、まとまった協議の時間を確保し、腰を据えた熟議を行うことである。

1点目については、一般的な公共図書館整備の過程を説明し、宇部市における検討状況を共有した。そのうえで、市民委員会として考えたいことや目標を明確にし、図書館と市民によって共に創る図書館リニューアルのあり方を改めて提示した。さらに、市民委員会後の市民対話の場として「UBE ライブラリーラボ」を紹介し、今後の活動の展望を共有した。

2点目については、テーマ別ディスカッションとし、90分間じっくり協議できるプログラムとし、委員がそれぞれの関心の高いテーマを選び、グループでディスカッションを行った。テーマごとの深い掘り下げや課題の整理について、多様な視点から議論ができ、ハード面のリニューアルだけではなく、すぐに取り組みそうなソフト面のサービスの見直し等についても意見が交わされた。

# テーマ別ディスカッション

基本構想のビジョンにつながるコンセプトに、第1回市民委員会で出た意見をマッピングさせ、3つのコンセプトを第2回・第3回市民委員会におけるディスカッション用のテーマとして設定した。これにより、基本構想の検討の土台に立ちながら、より具体的な計画につながる議論が進んだ。委員は、3つのテーマのうち1つのテーマを選び、90分間のなかでテーマに関連するポイントについて現状の課題や今後の提案を集中的な議論を行なった。

なお、各グループにはファシリテーターと図書館職員が同席し、委員同士のディスカッションをサポートしつつ、委員からの質問に対する回答や情報提供等を行いながら議論に参加した。

## 宇部市立図書館基本構想の振り返り

### <リニューアルのビジョン>

知識や情報が循環する新しい読書環境の創造  
ひととまちがつながり自己成長・表現できる、まちなかの居場所

### <ビジョンにつながるコンセプト>

(うち、テーマ別ディスカッションは①-③について)

- ① 「知りたい」「学びたい」を支える情報収集・発信拠点
- ② ひとやまちとの新たな交流と創造を生み出す場
- ③ 子どもから大人まで誰もが自分らしさを表現できる居場所
- ④ これからのまちづくりを共に考える「現代版・宇部方式」の実践

## ① 「知りたい」「学びたい」を支える情報収集・発信拠点

### <テーマ別ディスカッションのポイント>

#### 知りたい・学びたいをサポートするレファレンス・レファラルサービス

「知りたい」「学びたい」と思った時に、すぐに気軽に相談できる存在として、図書館職員や司書または専門知識を持った市民につながりやすい、レファレンス・レファラルサービスにつながる多様なアプローチのあり方と環境を整備する。

#### ※レファレンスサービス

図書館利用者の依頼に応じて、図書館職員が必要な情報そのもの、またはそのために必要な資料を検索し提供することで、利用者の知りたい・学びたいを支援するサービスのこと。

#### ※レファラルサービス

図書館利用者の依頼に応じて、図書館職員が必要な情報をもっている人あるいは機関や組織をつなぐことで、利用者の知りたい・学びたいを支援するサービスのこと。

### <議論であがった課題と提案>

#### 課題1 「図書館職員・司書の方とのつながりやすさ」

- 市立図書館にはどんな専門性や特性を持った職員・司書の方がいるのかを知らないで、誰に何を相談してよいのかがわからない
- 職員の方があまりにも忙しそうにしているので、こちらが心配になってしまい声がかげづらい
- 以前レファレンスに詳しい職員がいたが、退職したあとに相談しづらくなってしまった

#### 課題1 に対する提案

- 図書館職員の配置には、人間的・作業的なゆとりをもたせる
  - そのために、図書館業務を見直し、省力化／DX化の工夫をする
  - 図書館サポーター・ボランティアともしっかり連携して業務を効率化する
- 図書館職員の専門性や特性をもっと周知・広報する

#### 課題2 「レファレンスサービスの認知度の向上」

- そもそも図書館にレファレンスというサービスがあることを初めて知った、まだ知らない市民も大勢いる
- インターネットを使いこなす若い世代は、そもそも人に聞くことをせず、まず自分で調べる習慣がある
- 必ずしも図書館職員から声をかけてほしい利用者ばかりではない、むしろ自分で書架を見て探したい(ブラウジング)利用者もいる
- 館内のフリーWi-Fiの通信が弱すぎて使えない

### 課題 2 に対する提案

- 利用者にわかりやすいように「本の探偵」「コンシェルジュ」といった表現にする
- 利用者自身が、まずは自分で調べやすくなるような、使い勝手のよいシステムや仕組みを導入する
- 利用者自身が閉架書庫に入れて自由に本を探せる
- 館内のフリーWi-Fi の通信を強めて、利用者が個別端末からインターネットに接続して利用しやすい環境を整備する

### 課題 3 「子ども・子育て世代視点でのレファレンスサービスの検討」

- 児童書コーナー等のメインカウンターから離れたエリアでは、物理的にレファレンスサービスが使いづらい
- 子どもたちも自分からレファレンスサービスを使えるといい

### 課題 3 に対する提案

- 児童書コーナーに児童用レファレンスコーナーを設置する
- 常に誰かが同じ場所において、なんでも相談しやすくなる環境をつくる

### 課題 4 「いつでも相談できる体制・環境の構築」

- 知りたい・学びたいに親身になって寄り添ってほしい
- テーマ別の専門性をもった人に相談できるといいが、職員の方は異動があるので、常にその人に相談できる環境づくりは難しい
- 図書館職員がすべてのテーマに精通しているわけではない

### 課題 4 に対する提案

- 専門性をもった市民と協力し、「市民コンシェルジュ」として知りたい・学びたいをサポートしてもらう
- 図書館の蔵書や図書館ネットワークについては、図書館職員がサポートする

### <テーマ別ディスカッションのポイント>

#### (学校図書館とのつながり)

子どもたちにとって一番身近な存在である学校図書館と公共図書館が密接につながること、子どもたちが自分たちの力でより広く深い知識やまなびに触れることができる。学校図書館と公共図書館のつながりを、リアルとデジタルの両面から充実させる。

### <議論であがった課題と提案>

#### 課題1 「学校図書館と公共図書館の連携の充実」

- 子どもたちが学校図書館にない本を自由に探せる環境が整備されていない
- 学校図書館のパソコンから、公共図書館の蔵書検索にアクセスできない
- 移動図書館車が1学期に1回しか来ない学校もある

#### 課題1 に対する提案

- 学校図書館と公共図書館の蔵書検索システムを連携させる
- 学校図書館の利用者カードで公共図書館の蔵書を借りられる
- システムで予約した本を移動図書館車が学校まで持ってきてくれる
- 移動図書館車の学校訪問の機会を増やす

### <テーマ別ディスカッションのポイント>

#### (まちなかに広がる図書館ネットワーク)

分館を1館しかもたない宇部市において、市域全体に図書館ネットワークを広げていく広域サービスの取り組みは欠かせない。すでに実践されている、移動図書館車やまちかどブックコーナー等をどのように連携させていくか、それぞれの取り組みの効果をどう図るべきかを整理し、それらを支えるために必要なリニューアル後の図書館の機能・設備のあり方を考える。

### <議論であがった課題と提案>

#### 課題1 「移動図書館車に求めたいことはなにか」

- 移動図書館車の巡回先が増えて、巡回先での滞在時間が短くなっている
  - 移動図書館車が予約した本を受け取るための役割となっている
  - 一方で、インターネットでの予約ができない・困難がある市民にとっては、移動図書館車が来て、その場でじっくり本を選べることが重要

#### 課題1 に対する提案

- 移動図書館車は存在自体に特別感があるため、普段図書館には来ない・本に興味がない市民にも図書館サービスを届ける機会をつくるような運用方法を検討する
  - 本を積んでまちなかの場にでていくことの価値を高める
  - 本の物流としてだけでなく、コンテンツとしての移動図書館車の運用も考える

- 宇部ビエンナーレ等のイベントに1日移動図書館車が出張する
- ときわ公園に乗り入れて、本が読める場をつくる
- 貸出だけでなく、朗読会やおはなし会等のイベントも一緒に行く
- 移動図書館車の蔵書をイベントごとのテーマにあわせて入れ替える

## 課題2 「まちかどブックコーナーに求めたいことはなにか」

- まちかどブックコーナーの本をどのように活用してよいのかがわからない
  - 目的が、市民が本を手取ることなのか、本を通じて交流を生み出すことなのかによっても活用の方針は異なる
- 利用している人をあまり見かけない

## 課題2 に対する提案

- まちかどブックコーナーを設置している施設・店舗が、本を通じて図書館と関係構築できるようにする
  - 間接的なブックカフェ・ブックレストランとして設置し、設置者はまちかどブックコーナーを活用したイベント等を開催することができる
  - まちかどブックコーナーを通じて、設置者のビジネスを支援したり、広報を支援したりする
  - 設置者が本のリクエストができるようにする(現在も要望を聞きながら選書を行なっている)

## ② ひとやまちとの新たな交流と創造を生み出す場

### <テーマ別ディスカッションのポイント>

#### (市民の力を活かし、まちにひらかれた図書館へ)

宇部市ではコロナ禍でも工夫を凝らして、市民と連携したさまざまなイベントを行なっていた実績がある。図書館も同様に市民の力を活かしたサードプレイスとして、ひらかれていける可能性がある。市民の力を活かすためにも、図書館から広報周知活動や、市民に伝わりやすく親しみやすい館内サインや環境づくりが重要。

### <議論であがった課題と提案>

#### 課題1 「交流と創造を生み出すアイデア・しかけづくり」

- 本があるだけでは、新しい交流や創造は生まれない、なにかしらの工夫が必要
- 窓が少なく、暗く静かに過ごすイメージがついてしまっている
- コロナ禍によって自由に使える施設が減り、自由度がなくなってしまった
- 市民が企画・提案できるイベントや催しものの数が限られている



### 課題 1 に対する提案

- 館内を明るく開放的な雰囲気にする
- コロナと共存しながらも、市民が自由に過ごせるような利用方針とする
- 畳のある空間でゆっくりと過ごせるような場所をつくる
- 市民が主催となって読書会やビブリアお茶会等のイベントや催しを頻繁に開けるような場所をつくる
- 宇部市が力をいれている宇宙教育とつなげて、プラネタリウム機能や宇宙教育機能のコーナーをつくる

### 課題 2 「多様なニーズにあわせた各機能・コーナーの場所やレイアウト構成」

- 自分がリフレッシュしたいときには、他の自治体の図書館にある素敵なカフェがオアシスと感じられる、宇部市にもそういった場所がほしい
  - 自分は大きな窓に面したカウンター席で、行き交う人や車を見ながらコーヒーを飲む場所がお気に入り
  - 本が汚れてしまう恐れもあるので、利用方針の整理が必要
- エントランス脇の展示室は目につく重要な場所であるが、入り口が狭く、外からもなに行われているかわかりづらい
- 2階の学習室利用者が少ない、そもそも2階に上がりづらい
- 駐車場から館内に入るまでに濡れてしまう

### 課題 2 に対する提案

- 宇部市立図書館におけるカフェ機能のあり方を整理する
- 展示室を気軽に誰でも入りやすいデザインにする
- 学習席の利用状況が可視化できるシステムやサインを設置する
- 大人の学習スペースを設置し、大人が学んでいる姿勢を子どもたちも当たり前のように目にする環境をつくる
- 駐車場からのアプローチ屋根を設置する

### 課題 3 「伝わる図書館広報・館内サイン」

- 市の広報誌にある図書館のコーナーでの情報発信が少ない
- 毎月発行されている図書館だよりをまちなかで手にする機会がない
- 学習室というネーミングが硬い、緊張感がある

### 課題 3 に対する提案

- 広報誌の図書館のコーナーに子育て世帯向けの情報を載せる
- 各部屋の名前を親しみが持てるよう工夫する
  - たとえば、学習室ではなくフリースペース等
- 館内のコーナーや企画に接続できるような広報・掲示物の実践

### ③ 子どもから大人まで誰もが自分らしさを表現できる居場所

#### <テーマ別ディスカッションのポイント>

#### (子どもたちとまなびと本をつなぐ)

子どもたちにとって、一番身近な学習の延長線として、本をどのようにつなげることができるかが大切。学校での学習と図書館がどのようにつながると、子どもたちにより広い視野を提供できるかという視点で、子どもたちの館内での利用導線を考えたレイアウト・コーナーづくりを行う。

#### <議論であがった課題と提案>

#### 課題1 「子どもたちのまなびと連続する読書環境」

- 子どもたちは、図書館に学習機能だけを求めているようで、もったいない
  - 学習だけではなく、子どもたちが本を読むきっかけをつくる必要がある
- 図書館から遠い場所に住んでいる子どもたちは、図書館の存在さえ知らない
  - 学習席は高校生以上の大人が利用していることが多く、小中学生向けの勉強場所が少ない
- 検索機の前で勉強したいが、検索機を利用する人たちが気になってしまって集中できない
- 学習できる場所が圧倒的に足りない
- 学校や学校図書館との連携を強める
- 図書館が児童館やその他の施設の役割を背負うべきなのか、図書館のあり方と子どもたちとの関係性を見つめ直す必要がある

#### 課題1 に対する提案

- 子どもたちが主体性をもって関わられるような図書館イベント・企画を行う
  - 自分でつくったお話を紹介するような大会を実施する
    - ▶ 大分県玖珠町は「童話の里」として「日本童話祭」を開催している  
参考：玖珠町 - 日本童話祭(<https://dowasai.com/>)
  - 中学生が小学生や未就学児童に読み聞かせをする
  - 子ども版のビブリオバトルを実施する
  - 読書感想画の描き方や楽しさを知ったり学んだりする場をつくる
  - 読書感想画・文の発表の場をつくる
- 各学校の図書館や教育委員会と連携し、市立図書館を利用する仕組みをつくる
  - 市立図書館で調べ学習をするというようなカリキュラムを学校側とつくる
  - 学校単位でいつでも図書館見学に来られるようにする
  - 学校の先生向けに、公共図書館の使い方や授業支援の連携等をレクチャーする

## 課題2 「子どもたちのまなびの環境・居場所づくり」

- 誰にとっても気軽に訪れられる場所づくり
  - 学校に行きづらさを抱えている子どもでも、1人でふらっと来られるような場所
  - 過度におしゃれになりすぎると逆にいきづらさを感じる人もいる
  - 個別にさまざまなニーズがあるので、自分にとって居心地のよい場所を選びたい
  - 図書館目的以外の人も気軽に来られるような寛容性がほしい

### 課題2 に対する提案

- 完全にオープンではない、人目につきすぎない居場所をつくる
  - 本棚に囲まれた学習室
- 静かに勉強するスペースと話しながら勉強してもいいスペースに学習室の機能を区別する
- 図書館だけが目的ではなく「生きるための図書館」といったスローガンをつくる
- 気軽に試し読みできるようなスペースや低い棚があるとよい

### <テーマ別ディスカッションのポイント>

#### (大人のまなびを支援する)

大人たちは働きながら、それぞれのライフステージにあわせたまなびの場を求めている。未来の先行きに不安を抱き、不安定な社会に対して心配になることも多い。だからこそ、自ら調べ、まなべる環境づくりを行うことで、自らの進む道のヒントを見つけ、それぞれ仕事や暮らしのこれからのあり方に寄り添う情報や居場所をつくることが求められる。

### <議論であがった課題と提案>

#### 課題1「大人たちのまなびの環境・居場所づくり」

- 子どもたちだけではなく、大人たち自身もまなび続けることも一緒に支援する
  - 仕事や日々の暮らしに追われながらも、まなび続けられるような環境はなにか

### 課題1 に対する提案

- これからの多様なキャリアのあり方を示すようなコーナーづくり
- 仕事や日々の暮らしにつながる身近な出来事について、まなびを深める(仕事、育児、介護等)
- わざわざ図書館に来なくても図書館サービスとつながるような仕組みづくり

## <テーマ別ディスカッションのポイント>

### (図書館のあり方を一緒に考え、実行する市民との共創の場づくり)

図書館の管理運営に対して、市民も主体的に関わり、図書館を通じた自己表現・実現を行える体制を構築する。そのために、図書館活動を支援する市民の活動拠点を設置し、図書館と共にこれからの宇部市立図書館のサービスを考えていく場づくり・人づくりが求められる。

### 課題1 「市民と連携し、地域のあらゆる情報を蓄積する図書館運営」

- 図書館職員は常に異動があり、会計年度職員は雇用環境が不安定である
  - 図書館でのさまざまな活動や人的ネットワークが蓄積されづらい

### 課題1 に対する提案

- UBE ライブラリーラボが図書館と関わり続けることで、人や情報が断絶しないサービスのあり方を支える
- UBE ライブラリーラボのメンバーが常駐できるスペースをつくって、誰かしらはそこにいて、なにかあれば手伝える環境をつくる
- 図書館側で UBE ライブラリーラボの窓口となって一緒に相談しあえるポジションをつくり、双方に連絡・協力体制を構築

## 考察

第1回の市民委員会で示された委員の懸念に対して、それぞれ最大限対応できるよう企画を見直したことは、一定数の委員からは概ね前向きに受け止めてもらえた様子うかがえた。また、ほとんどの時間をディスカッションの時間と設定したことで、各テーブルで白熱した議論が交わされ、具体的な提案も数多く挙げられていた。

ディスカッションのなかでは、委員間であっても、図書館運営やサービスについて知っていることと知らないことの差が見られた。しかし、それらを互いに訂正しあったり、知らない部分については情報を共有して議論をフォローしあったりする姿勢も見られ、白熱しながらも、建設的な議論を積み重ねることができた。

テーマに基づいた具体的な提案のなかには、リニューアルとは関係なく、現時点から着手できるような取り組みも多数挙げられていた。それぞれの提案を今後、リニューアル計画として整理していくが、このようなすぐに取り組めるものやリニューアルを待たずに実行できるものについても区別を行なったうえで整理し、実現に向けた活動方針を図書館運営に反映していく必要がある。

# 記録写真

